様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：31604
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010　～　2011
課題番号：22830068
研究課題名（和文）施設と地域の「共生」問題の社会学的実証研究―日本のハンセン病療養所を事例に
研究課題名（英文）　Sociological study about ‘symbiotic’ problem between community and welfare facilities : Empirical research for Hansen’s disease sanatoriums in Japan

研究代表者　坂田勝彦（SAKATA KATSUHIKO）

研究者番号：60582012

研究成果の概要（和文）：本研究は、近現代日本のハンセン病療養所と近隣地域が取り結んできた歴史的な関係性をもとに、病いや障害を巡る排除と包摂の問題を検討した。そこからは、社会福祉施設と近隣地域の〈共生〉を巡る困難と可能性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research examines the relationships which were built between the inmates of Hansen’s disease sanatoriums in Japan and those who lived in community near them, in order to explore the exclusion and inclusion of illness sufferers and disabled people. From this research, we can understand the difficulties and possibilities of “symbiosis” between welfare facilities and community.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,090,000	329,000	1,419,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,190,000	659,000	2,849,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：社会学、福祉社会学

１．研究開始当初の背景

本研究は、以下の二つの問題意識をもとに開始された。

（１）今日、地域社会に福祉施設をいかなる形で位置づけていくかが大きな問題になっている。その背景には、障害者や高齢者を社会から排除する装置として機能しがちであった施設中心型福祉の問題が認識される一方で、急速な高齢化の進展とともに、高齢者施設などの福祉施設の需要が増え続けている状況がある。こうした状況を鑑みる時、「棄民」の場ではなく地域社会に根付いたものとして福祉施設を構成できるかが、日本社会の喫緊の課題となっているといえよう。

そこで本研究は、近現代日本のハンセン病療養所と近隣地域が相互に構成してきた関係性について検討する。なぜなら、上述の問題関心を考える上で、ハンセン病療養所と地

域社会の関係性は非常に充実した要素を有しているからである。

（２）ハンセン病療養所は設立の際、近隣地域から激しい排斥を受けた。だが、近隣地域で雇用の確保などの経済的影響が顕在化するに従い、排斥は背景化した。また、療養所が設置された各地域は当時は貧しい僻地であり、多様な職能や芸能を有した入所者が多数存在した各療養所は、地域社会における「文化の発信地」として機能してきた。

以上のように、ハンセン病療養所と近隣地域の関係からは、①療養所設立当初から療養所と入所者は近隣地域から激しい排斥を経験したが、彼らはそうした状況と向き合い、地域社会へ溶け込むことを模索してきたこと、②本来受け入れを望まなかったハンセン病療養所を押し付けられた近隣地域もまた、何とか強いられた状況から利益を得ることを試行錯誤してきたことが明らかになる。社会福祉施設と近隣地域の「共生」を考える際、相互に関わらざるを得ない中で生起した関係性は重要な問題であり、ハンセン病療養所と近隣地域が培ってきた利害関係を調停し生活を成り立たせていく生活知は、非常に示唆に富む知見を提示すると考えられる。

２．研究の目的

以上の問題意識から、本研究は近現代日本のハンセン病療養所と近隣地域が取り結んできた流動的な関係性を歴史的に検証することで、同じ地域社会の中に埋め込まれた施設入所者と近隣住民がいかなる実践を通して〈共生〉を模索してきたかを明らかにすることを目指した。近年「ソーシャル・インクルージョン」等の理念をはじめ、福祉施設と地域社会の関係は様々な形で議論されるが、従来「隔離・弧絶」の場とされてきたハンセン病療養所と近隣地域の関係からは、〈共生〉の課題へ示唆に富む知見を得ることが期待できる。

３．研究の方法

本研究は、福祉施設と近隣地域の「共生」を巡る課題について、近現代日本のハンセン病療養所と近隣地域の関係性に関する基礎的研究を通して探求した。その具体的な方法の内容は、以下の通りである。

（１）ハンセン病療養所と近隣地域の経済活動の検証――多磨全生園（東京都東村山市）及び長島愛生園（岡山県瀬戸内市）と近隣地域が 1930 年代から 60 年代後半に行った交易活動の内実について、各園の入所者へのインタビュー調査、各園所蔵資料の調査、また、近隣地域の主に公文書館等での資料調査を通じて検討した。

（２）ハンセン病療養所と周辺地域の文化活動の検証――上記の療養所に加え、文芸活動が特に盛んだった栗生楽泉園（群馬県草津町）が立地する草津町での（主に町立図書館等での）調査を通じて、様な施設と地域の関わりを検討した。

（３）施設入所者と地域住民とが経験してきた経済的・文化的活動の総合的検討――前記の（１）と（２）の成果を社会学的に整理することで、ハンセン病療養所入所者と近隣住民の歴史的経験から〈共生〉の課題と可能性を検討した。

４．研究成果

以上の問題意識、具体的な調査とその検討からは、以下の知見を得ることができた。

（１）文化活動が示唆する〈共生〉の在り方

５．の「主な発表論文等」に記載の共著収録論文などにあるように、本研究は、施設入所者が施設内外の人々とのかかわりを通じて非常に可塑的で重層的な社会関係を構築してきたことを実証した。ハンセン病療養所に

は戦後、様々な人々（その多くはボランティアや学生といった市井の人々だった）が訪れた。そして次第に入所者たちは彼らの支援をもとに、近隣地域へ、さらには遠隔の都市部へと歩み出していく。その際、彼らは楽団活動や芸術活動といった文化活動を介して、病者／健康者といった二分法に収斂しない関係性を他者との間に構築することに成功した。それらの活動は世紀転換期の「ハンセン病違憲国家賠償訴訟」に至る水脈となっており、政治的な対抗運動だけでなく、文化的な活動が施設と近隣地域をはじめとした「社会」との接点を形成する重要な営為であったことを示す。本研究ではさらに一歩踏み込んで、そうした個別具体的な活動の現場で生起する共同性に着目し、各種の活動を通じて入所者や関係者が感得してきた自足感の存在を明らかにした。

（２）経済活動に胚胎する実存的意味

ハンセン病療養所入所者にとって、施設収容に付随して生じたアイデンティティの解体は非常に深刻な問題だった。それまでの生活を半ば強制的に剥奪されてたどり着いた場所で、しかし彼らは多様な生業を模索し、新たなアイデンティティの獲得を試みた。５．の「主な発表論文等」に記載の「学会発表」で検討したように、特にそれは戦後、施設外社会との関係において試みられた。

本研究は上記に加えて、ハンセン病療養所と近隣地域は経済活動から，療養所が周辺地域にとっては貴重な就業機会の場となっていたこと、そして、療養所入所者にとっては特に戦後、近隣地域が経済的な交易対象となっていた状況を確認した。そこからは，ハンセン病療養所の立地する地域においては公式的な疾病理解に還元されない経験的な病いへの理解が育まれていたこととともに、そうした個別具体的な場における他者との出会いを通じて、入所者が自己のアイデンティティを確認してきたという、経済活動に託されていた実存的な位相が明らかになった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 1 件）
「ハンセン病療養所で生きることのアクチュアリティ――ある「職工」の経験に見る生業と自己」（現象学・社会科学会　第 26 回大会シンポジウム「ハンセン病問題をめぐって――排除・抵抗・アイデンティフィケ―ション」2010 年 12 月 5 日、大阪大学）

〔図書〕（計 1 件）
共著『いのちとライフコースの社会学』（藤村正之編、2011 年 11 月、弘文堂）に収録の「ハンセン病者の半生――ある盲人の経験に見る身体と共同性」p244-255

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
（　　）
研究者番号：

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：